

「私の青春第301救護班～追想のフィリピン～」木村美喜氏

昭和3年桶川市生まれの木村さんは、昭和19年8月、日本赤十字社第301救護班救護員としてフィリピンに派遣されました。米軍の空襲、上陸にともなう中部山岳地帯への逃避行から昭和20年12月復員するまでの過酷な体験をお話しいただきました。

南方第12陸軍病院に赴任後、9月には空襲が始まりました。傷ついた兵士が運ばれ、不眠不休の看護活動を行いました。バギオの兵站病院に異動後間もない昭和20年1月23日、空爆によって病院が焼失するとともに、およそ200名が爆死し、その中には埼玉班の看護婦26名中9名がおりました。翌日から埋葬作業が行われ、友人の遺品を抱き、生きて日本に戻るんだと誓いました。4月、最後の支給（大さじ1杯の塩・乾パン・天幕）を受け、山岳地帯への転進が始まりました。髪を切り、戦闘帽をかぶって男装しての逃避行でした。一方は戦塵の谷、一方は絶壁の道なき道を傷病兵の看護をしながら前進しました。6月頃から看護婦たちも衰弱し、病気や栄養失調で次々と亡くなりました。終戦の後、米軍収容所に向けて移動が始まりました。「一足歩けば一足日本に近づくのよ。一足歩けば一足お母さんに近づくのよ。それでも、あなたは日本に帰りたくないの？お母さんに会いたくないの？日本に帰りたかったら歩きなさい、お母さんに会いたかったら歩きなさい。」と同僚に励まされながら、収容所にたどり着きました。空爆、逃避行の末、日本に帰還することができたのは埼玉班26名中、10名だけだったのです。

木村さんは最後に、「戦争ほど恐ろしいものはありません。こうしたことは二度とあってはなりません。私が体験したことを誰にも味わってほしくはないのです。どうか、皆さんの手で、戦争のない幸せな社会をつくってください。一人一人の命が大切にされるよう世界が平和でありますように。」と力強く結ばれました。

（この交流会の内容は、「資料館だより」から転載しました。）